

Kestenberg Movement Profile の記譜における 学びの過程と分析対象者への調律に関する検討

A Study of Learning Process and Attunement to Clients in Notation of Kestenberg Movement Profile

崎 山 ゆ か り, 中 め ぐ み

(武庫川女子大学文学部教育学科)

(おや・こムーヴメント Atelier M)

Yukari Sakiyama, Megumi Naka

Department of Education, School of Letters

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

It is hard to master how to notate humans' movement by Kestenberg Movement Profile (KMP) for us because there are few opportunities of learning in Japan. We have been learning the technique through personal communication with KMP specialists in the United States.

In order to know the notating method, we made our own original video clips of a two year old girl for analyzing materials. We also asked a KMP specialist to draw the KMP form and to offer all the raw data. From the inquiry of each notating data and many correspondences through email exchanges, we have noticed the following three issues. They are; difficulty of drawing rhythm lines, ambiguity of choosing movements for notation, and significance of attunement to clients as KMP analysts.

We also have found a new important idea for notation of KMP. KMP analysts need a kind of experience of attuning clients' rhythm through physical sense, as expectant mothers would attune their fetuses. The attunement should be also independent of any vision. This fact lets us know our Japanese advantages from our bodily cultural background. Actually, the KMP specialist studies Shiatsu and works as Shiatsu practitioner. Our bodily culture has many intimacies with harmonic movement and breathing from martial arts concept such as "MAAI". The concept of attunement to clients in KMP probably includes these communicative ideas. A possibility for our cultural advantage will be recognized in the process for attunement.

1. はじめに

Kestenberg Movement Profile (KMP)¹⁾は、ダンス・ムーブメントセラピーなどで用いられる精神分析的視点をふまえた動きの分析方法で、乳幼児の発達段階とその時期に多く出現する動きを関連づけた理論的基盤を有している。KMPでは、親と子の非言語レベルでの動きのリズム性から成る関係性に着目しており、コミュニケーションにおけるリズム協調の重要性を指摘する近年の乳児研究²⁾とも関連している。さらには、発達におけるダンスや音楽などを通じたダイナミックな体験の必要性が、乳児研究者からも論じられる³⁾ようになってきた。

これまで筆者らは、KMP理解を進めるために、運動分析における専門用語の検討⁴⁾や、それら用語の解釈についての検討⁵⁾、さらにKMP理論の枠組を図示した色別円形図^{註1)}の訳出などに努めてきた。

現在, 日本国内で KMP を専門的に学べる機会は皆無であり, 文献研究を中心とせざるを得ないのが実状である. しかしながら, KMP は実際の動きのリズム性に着目し, そこから動きの特性などを分析する詳細な記録が必要である. そのためには, 実際の動きの記譜を学ばなければならない. この手技の獲得には, ダンス・ムーブメントセラピストを養成する大学院での学びに加え, 継続的な記譜のトレーニングが不可欠である. つまり現状では, 日本国内で KMP における記譜の手技を習得することは事実上不可能となる.

そこで本研究では, これまでの KMP の学びのための取り組みを概観し, アメリカ在住の KMP 分析専門家によるスーパービジョンや, KMP フォーム作成を依頼した専門家との電子メールを通じた質疑応答の記録を元に, 記譜の学びの問題点と解決への筆者らの取り組みを省察する. その上で, 分析者が分析対象者に身体のリズム性を調和させ, 意図的な調律を行いながら記譜をする必要性と, 分析者側の課題について検討する.

2. これまでの KMP の学び

これまで筆者らは, KMP 指導の中心であるアメリカ国内でそれぞれの学びを重ねてきた. 古くは, 中が 1998 年に Antioch 大学院においてダンス・ムーブメントセラピー集中コースを受講し, また American Dance Therapy Association (ADTA) の年次大会において KMP の学びに触れたことに端を発する. その後崎山も関連文献や資料映像を集めながら, ADTA の年次大会において過去 20 年以上に渡り毎年開催される KMP 関連のワークショップに, 2007 年頃より可能な限り参加してきた. しかしこれらの学びは, Table1 が示す通り KMP 分析の全体を学ぶ系統性は乏しく, Table2 に提示した正規の KMP 分析家の資格取得のための学びとは, 大きく異なっている.

現実的には海外での継続した学びは困難であることから, 個々のアメリカでの体験をふまえ, 2009 年より文献研究に特化した取り組みを共同研究として開始し, KMP 応用法の翻訳⁶⁾を含む, 開発者の Kestenber,J. の理論の元となった乳幼児の精神発達理論⁷⁾の読解に努めている段階である.

Table 1. ADTA 年次大会における KMP 関連のワークショップ(2007～11 年分)

年	発表者	タイトル	内容
2007	Loman & Sossin	KMP contributions to work with Children on the Autism Spectrum	自閉症スペクトラムの子どもへの治療に活用できる KMP のテンションフローとシェイプフローの用い方を体験的に学ぶ。
2008	Loman	KMP Contribution to Pregnancy :Prenatal Movement, Singing and Drawing	KMP の幅広い活用方法の紹介として, 妊婦とのワークを紹介し, エクササイズを通して胎児の動きとの調律を学ぶ。
2009	Loman & Sossin	Observing Children with Autism in Interaction :Clinical Implications of Sequential KMP Patterns	自閉症児の相互性を観察方法として, KMP のリズムパターンを体験的に学び, リズムを生み出し他者と協調し合う方法を学ぶ。
	Loman	KMP as a Self-Discovery Dance Exploring Personal Movement Patterns	KMP のリズム特性の連続した動きの体験をふまえ, 個々が持つ動きのリズム特性やその嗜好性を探る。
2010	Birklein & Kipnis	KMP in a Relational Framework: The Affective and Interpersonal	KMP の精神分析的理論基盤に着目して, 自身の表現活動における特性を探る。
	Loman, Sossin, Birklein, Hastie & Kestenber,J.A.	Clinical and Cultural Challenges and KMP	身体の文化性をふまえた KMP のあり方を探るため, 発表者がこれまで関わった国での KMP 用語の翻訳やその理解の相違をパネルディスカッションする。
2011	Loman	Collaboration through Movement: KMP Movement Patterns Underlying Mutuality and Disconnection	KMP のリズム性に基づく動きのパターンを体験することにより, 他者との動きの相互性や断裂性を体験し, 動きによる共同作業を体験する。

* 年次大会プログラムより崎山再構成

Table 2. KMP 分析家の資格取得に必要な Level 1 のカリキュラム

概要	診断や治療に用いるための動きの観察, 評価, 分析の基礎的原理に親しむ。
学習目標と時間数	発達段階に沿って心理学的視点を持ちながら, さまざま動きを体験し, 認知し, 記譜し, 解釈する。Level 1 はのべ 90 時間を要し, 30 時間ずつ 3 つの枠組で構成される。
到達目標	動きには本人の嗜好性や文化性が影響することを理解し, 発達の側面を理解しながら, 非言語的分析ツールである KMP が使えるようになる。
使用教材	・ Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999) ・ TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE The Sand Point Movement Study Group Child Development Research 1999 Revised Loman, S. Antioch University
学習の枠組	1. テンションフローリズム, 両極性シェイプフロー, 単極性シェイプフロー 2. テンションフロー特性 3. 前駆エフォート, エフォート, 方向性シェイプ, 面性シェイプ, および身体的特徴 * 課題で示された DVD 映像の動きを観察し, KMP フォームを作成した上で解釈についてレポートを作成し, 分析結果の妥当性の審査を受ける。

* KMP ホームページより崎山訳出及び再構成

3. 記譜の実態

こうした文献研究と並行して, KMP の実際の動きの分析技法の基礎である動きの記譜の手技について, 2011 年より新たな取り組みを始めた。それは KMP 研究と指導の専門家に, 記譜の実態を知るための分析資料作成を依頼し, 分析前の記譜そのものである生データを入手することであった。

KMP の記譜については, 長期にわたる訓練による手技の獲得が必要である。Figure 1 は, KMP の中の一項目であるテンションフローリズムにおける 10 種のリズムを観察した際にそれぞれ記すラインを示したものである。これらのラインの記譜は, 動きの中立性を示すニュートラルラインを中央に置き, その上下の振幅で動きの大きさを示している。更にニュートラルラインに示されたそれぞれのラインの幅や形がリズム特性の違いを示すものである。これらのラインに基づく記譜は, 原則として動きの観察と同時進行でなされる。つまり, 記譜者は分析対象者の動きを観察しながら, 手元ではその動きに沿ってこのようなラインを記すのである。

リズム	ライン	リズム	ライン
Sucking		Snapping & Biting	
Twisting		Strain/Release	
Running/Drifting		Stopping/Starting	
Swaying		Suring/Birthing	
Jumping		Spurting/Ramming	

* ラインは, TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE, The Sand Point Movement Study Group Child Development Research 1999 Revised Loman, S. Antioch University pp.6-8 より抜粋

Figure 1. テンションフローリズムの記譜のライン

従って, 専門家と初学者の記譜のラインの安定性は Figure 2 に示す通り大きく異なる。専門家は Sucking のリズムが変わっても一定したラインを描いている。一方初学者は, Sucking のリズムから Snapping/Biting のリズムを観察し, それをニュートラルラインに沿って記譜しようとしているが, 動きの観察のため手元が十分に確認できないまま記譜を進めているため, ラインが大きく中央からずれてい



Figure 2. 専門家(左)と初学者(右)のラインの記譜の違い

Table 3. KMP フォーム作成依頼のための映像の概要

分析対象者	定型発達の2歳2ヵ月女児 A
分析者	Suzanne Hastie 氏 (KMP 分析有資格者で KMP 色別円形図作者)
分析映像	A の母親による日常場面の映像より以下の場面を抜粋したのべ 45 分 A と母親の非言語的交流の様子を KMP 分析からどのように把握するかを理解を意図していたため、映像はできるだけ母親とのかかわりのある場面で構成した。
女児 A の映像内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 母親による絵本の読み聞かせと昼寝のための寝かしつけ (3 分) 2. 保育園から自宅までの徒歩による母親との降園 (6 分) 3. 自宅内でのままごと遊び (26 分) 4. 子ども向けテレビ番組の視聴 (10 分)

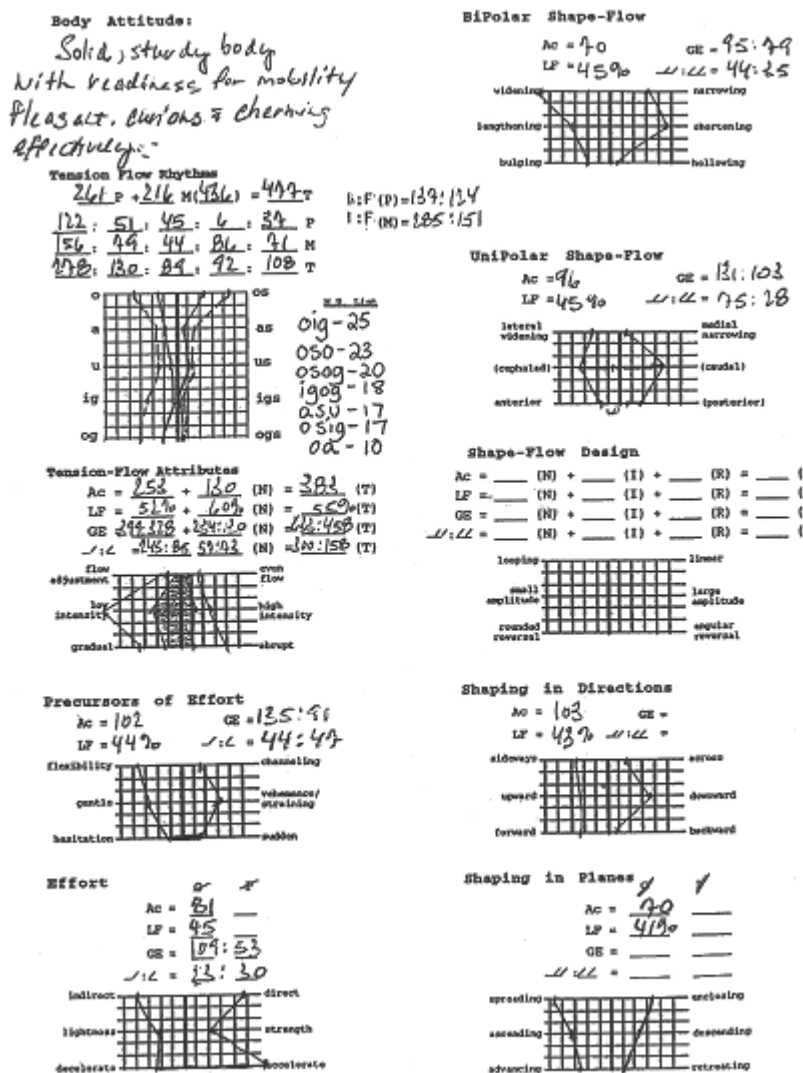


Figure 3. A の KMP フォーム

るのが認められる。さらに、ラインの一部が重なりあい、時間経過と共に動きが進行していることを示す記譜ができていない。そのため、本研究においては、KMP 分析の有資格者へ分析のための全ての生データの提供、KMP による分析結果である KMP フォームの作成を依頼し、その結果を元に記譜の実態について知ることとした。

4. 映像作成と専門家による KMP 分析

記譜の実際をより具体的な生データと共に理解するため、中が作成した幼児の動きの映像を元に、KMP 分析家へ KMP フォームの作成とその解釈を依頼し、同時に記譜に関わるすべての資料提供を求めた。その内容を以下の Table 3 に示した。

映像資料とその説明の英文を 2012 年 3 月に Hastie 氏へ郵送し、資料内容に関する質問には随時電子メールのやり取りで対応した。2 ヶ月後をめどに、KMP フォーム、A の発達に関する KMP からの解釈、これらの作成のための A の動きの記譜や統計的処理の全資料の提供を求めた。(なお、これらの依頼についてはアメリカでの KMP 分析の費用と同等の支払いを行っている。)

Hastie 氏から結果として送られた同年 5 月の KMP フォームが Figure 3 である。この図と共に送られてきた解釈には「矢状面(前後方向)の移動が可能となる身体発達途上であり、水平面(左右方向)での他者交流は可能な段階である」、「精神発達段階上では、尿道期の過程と同様に肛門期の特質が見出せる」、「好奇心が強くチャタリングで、物事に集中できる豊かな情動が認められる」などの観察コメントが寄せられた。送られてきた資料を確認しながら、内容について電子メールを活用した質疑応答を継続的に行った。

こうした一連のやりとりで明らかになった点は、動きの一部を取り出して実際の時間と同期させて、分析者が記譜をすることであった。それは、映像に映る全ての動作、つまり 45 分の動きの全てを対象とするのではなく、あくまでも分析者が何度も繰り返して見た映像全体から、特徴的な動きを抜粋するということである。しかしこの事実は、テキストとして用いられるトレーニングマニュアルにも、大学院における必読書である KMP テキスト⁸⁾にも記載されていなかった。ここに、記譜の手技を獲得しなければその理論をも十分には理解できない KMP 学習の困難さが認められる。

今回の分析のための生データの入手とその内容に関する専門家とのやりとりから、分析者自身の判断によって記譜の対象となる動きが選別されている事実が明らかとなった。例えば、テンションフローリズムの場合、リズム特性を実際の動きに沿って Figure 1 に示したラインを元に記譜し(Figure 4 上)、その後、具体的な分析作業としてラインの振幅のひとつひとつに、その発達段階を示す略号を書き込む(Figure 4 下)。さらに、記号ごとに個数をカウントし、最終的には比率を求めて数値化する(Figure 5)。そして、動きの特性を KMP の内容ごとに、強弱や長短など対概念で示されるような動きの特質について、その全体的なバランスを評価しているのである。

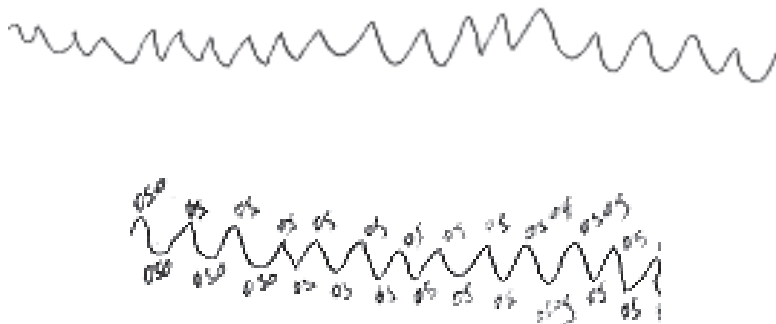


Figure 4. A のテンションフローリズムの記譜(一部抜粋)

Client: _____ Exam Date: April 2012 TENSION FLOW RHYTHMS Observer: Shizuko Hastie COUNT

Pure		Mixed Rhythm Components	
os	44	os	47
o	48	o	49
as	19	as	51
a	27	a	28
us	22	us	9
u	13	u	25
lgs	0	lgs	10
lg	6	lg	26
ogs	4	ogs	4
og	22	og	67

mixed											
Underlined rhythm is dominant and is counted once as pure and once as mixed.											
	os	o	as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
o	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
as	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
a	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
us	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
u	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
lgs	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
lg	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
ogs	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
og	os		as	a	us	u	lgs	lg	ogs	og	
Total	47		5	15		28	4	40	3	44	Total Mixed Rhythms: 216

Figure 5. A のテンションフローリズム集計表

これらの資料を元に、生データとして提供されたテンションフローリズムの無数のラインが映像のどの場面を抜粋して記譜しているのか、動きの中で見出される基本パターンのリズム特性(ピュアリズム)といくつかの特性が混じり合うリズム(ミックスリズム)との見分け方など、より具体的な質問を掘り下げ、Hastie 氏との電子メールによるフォローアップを続けている。

5. 調律 (Attunement) の重要性

KMP 分析の過程に関する省察はまだ課題も多く、さらなる検討が必要なことは言うまでもない。しかしながら、今回の記譜の実態の検討において、Hastie 氏も筆者らも同様に重要と考えているのが、分析者側の分析対象者への調律の問題であった。分析者が映像に移し出された分析対象者の動きの特性を瞬時に捉え、そのリズムを KMP 分類に準えて、Figure1 で示したそれぞれのラインを動きに同期させて記譜をする。確かに専門家の手技ではあるが、どこまで正確に記譜できるのかの検証は、現段階では困難である。もちろん、KMP 分析家の資格を得るためには、実際の課題映像から KMP フォームとその解釈をまとめ、指導者にその妥当性を認められなければならない。つまり、Table 2 の学習の枠組で示したように、妥当性のある分析結果を導かなければ資格は取得できないのである。

生身の人間の動きを機械的に分析するのなら、コンピュータなどの動作分析ソフトを活用するのが、その正確性において望ましいのは言うまでもないだろう。それならば、なぜ KMP 分析が他者との、特に母子間における非言語的つながりを判断するのに必要とされるのだろうか。この疑問にひとつの道筋をつけたのが、KMP における調律(attunement)の概念であった。

Kestenberg は、母子関係の成立における調律の重要性を解き、その在り方を嗜好に基づく部分的な調律から、互いに共感できた上での調律など、段階的な調律の在り方を分類⁸⁾している。二者関係の確立にはその相互性が不可欠ではあるが、母子関係を考える場合、まずは母親側が子どもへの調律を行うことが求められる。このことは、KMP の記譜においても同様であり、分析者はまず対象者の動きへの調

律が求められるであろう。これは実際の動きとしてではなく、映像の中の動きへ自身の心を寄せるということである。この点について、今回分析を担当した Hastie 氏は今回の A の分析について次のように述べている。「私はまずテンションフローを描かないで彼女の動きを観察します。そして2回目は彼女の動き方に自分自身を合わせます(つまり私は、彼女の動きの質を感じようとするのです)」(Hastie 氏からの電子メール 2012.7.3 より、崎山訳出)。このことは、崎山が実際の記譜のスーパービジョンを受けた折に、Loman 氏が語った「頭で考えてはいけない。対象者の動きのリズムを感じ、その感覚を腕に乗せて同期しながらリズムのラインを描くことが大切である」という内容(2011.10.21 のスーパービジョン記録より)と一致している。

このような指摘は、対象者へのある種の波長を合わせる行為とも捉えられ、分析者本人の主観に負うところが大きい。目の前のある動きを見つつも、視覚に頼るだけではなく他者を感じるものが求められるのである。さらに KMP における調律は、分析者と分析対象者間のみならず、妊婦と胎児との関係性の確立にも関連があると指摘されている。それはあたかも他者を自分の中に取り込み、受け入れ、感じingことを意味している。Loman¹⁰⁾や Tortora¹¹⁾が、母親が実際には見えない胎児の動きを感じ、心を添えていくことから母子関係が始まっていると指摘するのは、まさに視覚に頼らない体感からの調律にほかならない。

しかしながら、このような感覚的とも言える他者への調律の質をどのように保証していくのかという、別の問題も同時に存在している。KMP 分析家としての質の保証のため、入門段階では 90 時間のカリキュラムの中で、KMP の項目毎に記譜を繰り返し体験できるように構成されている。さらに、資格認定のためには自身の KMP フォーム作成とその解釈についての審査があり、前述したように妥当性を欠く分析の場合は、資格が認められずフォローアップコースへ進まなければならない。

今回分析を依頼した Hastie 氏は、ダンス・ムーブメントセラピーや KMP 分析の傍ら、アメリカで Shiatsu Practitioner、すなわち指圧の専門家としても活動が続けている。この点について彼女に問いただしたところ次のような返答があった。「KMP と指圧の関係については、私自身もっと考えていけないと思います。けれども、KMP も指圧も両方が人と共にあり、お互いをよりよくつなげていくことを手助けしているのです。ジャネット^{註2)}が知っているかどうかはわかりませんが、実は彼女の母親は指圧を学んだことがあるのです(もしかすると何か発見があったのかもしれません)」(Hastie 氏からの電子メール 2012.7.27 より、崎山訳出)。KMP における調律は、他者身体を知り、それに直接触れて関わる技法である指圧とは全く別物であることは明らかである。しかし、そこに開発者である Kestenberg 自身、そして指導者である Hastie 氏が期せずして指圧を学び、動きの観察の中で他者への調律を試みたことは、偶然の一致以上の示唆を与えてくれるだろう。

6. おわりに

KMP 分析の詳細についての検討は、記譜の問題だけでなくその統計的処理の在り方など、これからも検討すべき点がある。さらには、KMP の理論の柱となる性的発達段階における尿道期の理解や、女性である Kestenberg が構築した男性性や女性性のとらえ方など、その概念においてもさらなる理解が望まれる。

しかしながら、西洋の精神分析理論を基盤とし、その身体文化を背景に生まれた動作分析法が、分析対象となる個の身体を、常に他者身体とのつながりやその共感性を前提として分析している事実は着目すべき点である。他者身体への共感やそのリズム特性とは、日本古来の武道の「間合い」等日本の身体文化との親和性を感じられる。今後も継続して KMP 記譜法を学びながら、KMP の調律の概念を中心に検討していきたい。

文 献

- 1) Kestenbergh-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenbergh Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 2) Beebe, B., Rustin, J., Sorter, D. and Knoblauch, S., 乳児期の間主観性さまざま－視点の拡大とその精神分析への応用, 丸田俊彦監訳, 乳児研究から大人の精神療法へ－間主観性さまざま－, 岩崎学術出版社, pp.63-65 (2008)
- 3) Stern, D. N., Forms of Vitality Exploring Dynamic Experience in Psychology, the Arts, Psychotherapy, and Development, Oxford University Press, pp.73-98 (2010)
- 4) 崎山ゆかり, 子どもの動きの評価法に関する基礎的研究－ダンスセラピーにおける Kestenbergh Movement Profile を手がかりにして－, 武庫川女子大学紀要人文科学編, 57, pp. 19-26 (2009)
- 5) 崎山ゆかり & 中めぐみ, Kestenbergh Movement Profile における運動分析専門用語の解釈に関する検討, 武庫川女子大学紀要人文科学編, 58, pp. 13-21 (2010)
- 6) Loman, S. & Sossin, K. M., Applying the Kestenbergh Movement Profile in Dance/Movement Therapy: An Introduction, Edited by Sharon Chaiklin and Hilda Wengrower *The Art and Science of Dance/Movement Therapy Life is Dance*, Routledge, 2009 pp.237-264, 崎山ゆかり & 中めぐみ訳, ダンス・ムーブメントセラピーにおけるケステンバークムーブメントプロフィール(KMP)適用法入門, ダンスセラピー研究, 6 (2012) 印刷中
- 7) Kestenbergh, J., *Children and Parents: Psychoanalytic Studies in Development*, Jason Aronson, Inc. pp.3-154 (1975)
- 8) Kestenbergh-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenbergh Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 9) 前掲書 7) pp.157-170.
- 10) Loman, S., Attuning to the Fetus and the Young Child: Approaches from Dance/Movement Therapy, *Zero to Three*, vol.15, pp.20-25 (1994)
- 11) Tortora, S., Join My Dance: The Unique Movement Style of Each Infant and Toddler Can Invite Communication, Expression and Intervention, *Zero to Three*, vol.15, pp.1-19 (1994)

註

- 1) KMP 指導者 Hastie, C. S. が 1998 年に作成した KMP の分析項目を円上に色分けして階層化したもの。本人からの許諾を受け、2010 年に崎山が訳出している。
- 2) Janet Kestenbergh Amighi はケステンバークの娘で、現在 KMP 研究家として後進の指導に当たっている。